

四月末にこの教会伝統の北三会に出席しました。夕方に集まって二時間ほど何でも喋って良いと言う会です。会衆派の伝統を持つこの教会独自のもので、交流という意味でも、これからの教会の発展を話すためにも大切な会ですので、できるだけ積極的に活用していきたいところです。今回は自己紹介を兼ねて色々なお話しをうかがい楽しいひとときを過ごしましたが、これからは教会のための自由な話し合いも続けていきたいところですね。特に北三教会はこれから一〇〇周年企画があります。皆さんの意見を取り入れつつ、ヨキものにしていきたいものです。今回はこの北三教会の昔の活気についてお話しをうかがいました。特に若者で活気づいていた時代があったことが分かります。特に若者だけにいろいろなチャレンジをしていたということをお聞きしました。それをこれからの伝道にも生かしていきたいものです。

世界に目を向けると、キリスト教は世界宗教の大切な一角であり、日本におけるキリスト教は決してマイナーな宗教ではありません。しかしここまで来るには、いろいろな紆余曲折もありましたし、葛藤もありました。いくつもの失敗を経ています、それでも世界宗教へと発展してきた経緯があります。それはキリスト教を世界が求めていたという事実があることを忘れないようにしたいものです。言い換えると、それはキリスト教というのが、様々な地域においてトライアンドエラーを繰り返しながら、その地域に合った発展をしてきたからです。失敗しつつチャレンジしてきたことの繰り返しの歴史です。これからの日本にとって、そしてこの仙台の地において、その地域に合った伝道を話し合いながら進んでいきましょう。

世界的に見て大きな宗教となったキリスト教ですが、最初は本当に小さな群れでした。

イエス様が存命の頃は大勢信じる人もいて、イエス様を教祖様のように慕って集まる人々が数千人規模でいたことが分かりますが、イエス様が十字架にかけられてしまうと、あっという間に誰もいなくなってしまうました。

特にそれは弟子達に顕著でした。この人はユダヤの王様になる人だと信じて従ってきたのに、あっけなく殺されてしまった訳です。そしてイエス様が殺されたという事は、イエス様に従っていた自分たちも命が危ないという事ですすぐに逃げ出してしまいました。

イエス様が十字架に付けられたまさにその日、信徒の数はほぼゼロになってしまったと言えます。そこで終わればキリスト教は消えてしまっていたでしょう。

しかしながら、その後弟子達は再び集まります。最初の集会は数人と言ったところでしょうか。それが本当の意味での最初のキリスト教の始まりです。

そしてイエス様は復活なさったと彼らが主張するようになって、本当にイエス様が神の子である事を確信した人々を中心にキリスト教は立ち上がることになります。

その中心となったのがイエス様の弟子達の中心となった人たちです。聖書には十二弟子として知られており、カトリックではそれぞれの弟子達が聖人として知られます。しかし彼らは生前のイエス様にはいつも叱られてばかりでしたし、イエス様の十字架を前にしたときに逃げ帰りました。これは重大な裏切り行為でした。非常に悪い言い方をしますが、裏切り者がどの顔をしてイエス様を伝えられるのかと言う立場です。

しかし彼らは再び立ち上がりました。これがキリスト教の本質の一つを意味しています。それは、人は失敗しても立ち直れると言うことを伝える事です。

彼らが立ち上がることが出来たのは、復活したイエス様と出会ったことからです。失敗は彼ら自身がよく分かっていました。最も大切なイエス様を裏切ってしまったことから、彼らは生きていく事さえも絶望してしまうような状況です。普通このような状況だと、敗北者として一生を生きるしかありません。もうあとは人生を投げてしまいたくなります。いや、実際双なりかけていたかと思えます。そんな彼らが立ち上がったのは、イエス様と再び出会う事が出来たからです。これはいくら強調しても良いのですが、イエス様との出会いとは、自分自身の人生を本当に意味あるものにする事だったからです。彼らが立ち上がったのは、イエス様と出会い、そしてイエス様から使命を与え羅宝に他なりません。

人が成長するのは、何度も失敗を繰り返すことからで、失敗の中で得たものを繰り返して人生は続いていきます。私たちに関して言えば、失敗は人生の肥やしのようなものです。

信仰を語る上で、二つの考え方があります。一つは完璧を目指し、失敗を許さない考え方で、もう一つは失敗を受け入れる考え方です。教会によってはどちらの考え方もありますが、失敗を受け入れることを、成長として考えることもできます。

この成長とは、人生の成長とは少し異なります。そこにイエス様との出会いがあって、初めて失敗が意味を持つのですから。

今日の聖書箇所では、これまでイエス様がお話しになったことに対して、弟子達は二九節と三〇節で「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます」と話しています。イエス様の言葉を聞いて感動した弟子達は、ここで、イエス様こそ本物の神の子であるとそう思いました。ここで彼らが言っている言葉は真実心から出ていたものでしょう。

そんな弟子達に対してイエス様の態度はどうだったのでしょうか。前後しますが、二六節と二七節でイエス様は「その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである」とお話しになっています。

神様は弟子達の失敗を既に赦しておられます。これから弟子達はイエス様の十字架を見て、逃げ出すという裏切り行為を働いてしまいましたが、それに対して、イエス様は神様にあえてその事を取りなすことはしない。と宣言されています。なぜならその必要は無いからです。神様はあなた方のことをよく知っておられ、あなた方のことを既に愛されておられ、赦しを与えているからです。

あなた方がこれから私に何をしようとしても、私は既にあなた方を許しているし、神様もあなた方を愛されている。だから安心なさい。そうあらかじめ言っているのです。

そしてイエス様は続いて三二節で言います。「だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。」あなた方が裏切ることはもう決定しているのだ。だけど、私はそんな事は気にしていない。

これらの言葉は今の弟子達には理解が出来ません。自分たちが裏切るなんて事は起こらないと思っているからです。しかし、ここでイエス様がこれらの言葉をお話しになったのは、後になって弟子達には救いの言葉になります。これは大変重要なのです。

イエス様の十字架を知った弟子達は一度恐ろしさのあまりに逃げます。しかし再び弟子達が集まったと聖書には書かれています。こんな私でもイエス様は赦してくださっていたのだという思いが、彼らを再び結びつけることになるのですから。

イエス様の十字架の直後、一度逃げてしまった弟子達が何故集まる事が出来たのか。ほんの小さな群れかもしれませんが、彼らは確かに再び集まる事が出来たのです。それは、「私はあなた方を既に赦している。神様はあなた方を愛されている」この言葉が彼らをつなぎ止めたとも言えるのです。

神様は赦してくださるといふ思いはとても重要なものです。

私たちは人生の中で様々な苦しみや、痛みを覚えます。中には私自身がしてしまった大きな過ちというものに心が痛むこともあります。信仰の上にもそれはほぼ必ず起こります。

そんな時、神様は私を愛してくださるといふ思いは再び立ち上がるため、そして信仰を強めるためには大切なものとなっていくものです。

何より赦されているという思いは、「あなたの生き方はそれで良いのですよ」と言われることでもあります。赦されて生きているという思いは、私が今ここで生きていることは、神様によって祝福されていることを信じることに通じます。

私たちの過去、そして未来の人生にあって、多くの間違いを犯しているかもしれません。イエス様を知り、イエス様を信じる人は、神様によって過去が、そして未来に渡って赦しを与えられています。その事実をかみしめ、信仰生活を歩んでいきましょう。